CSS-EEST19　報告

九州大学総合理工学研究院　CSS-EEST19 議長
伊藤　一秀

九州大学総合理工学府は韓国・釜山国立大学校，中国・上海交通大学と協力して，環境・エネルギー・物質に関連する最新研究成果の発表会を継続して開催している．研究成果の発表会と書いたが，実のところは学生交流に本質があり，当初は英語で国際交流する機会の確保に主眼が置かれていたようである．この学生交流のためのシンポジウムは1998年に始まった韓国・釜山国立大学校，浦項工科大学校との2カ国3大学の共同シンポジウムCross Straits Symposium on Materials, Energy and Environmental Sciences（CSS）を端緒とするもので，切れ目無く毎年開催されてきた歴史あるシンポジウムである．2013年にはキャンパスアジアプログラム（エネルギー環境理工学グローバル人材育成のための大学院協動教育プログラム：www.tj.kyushu-u.ac.jp/campus-asia/）と連動する形に修正され，現在の3カ国3大学によるCross Straits Symposium on Energy and Environmental Science and Technology（CSS-EEST）にアップデートされ，現在に至る．

本年度で19回目となるCSS-EESTは，九州大学筑紫キャンパスを会場として，平成29年11月29日（水），11月30日（木），12月1日（金）の3日間開催された．今回は，韓国・釜山国立大学校からは学生77名，教員14名，中国・上海交通大学からは学生30名，教員6名，ホストである九州大学総合理工学府からは学生66名（発表者），学生協議会メンバー20名（博士課程学生），教員12名の，合計225名もの教職員・学生が参加する比較的大きなシンポジウムとなり，懇親会会場の「ぞんね」のスペースに全員が入りきらず，ロビーにまで参加者が溢れていたことからも，多分，これは過去最高の参加者数であったと推察している（正確な参加者数の履歴データが残っておらず，これはあくまで伊藤の予想）．

例年のCSS-EESTは3カ国の教員によるPlenary Talk，学生による口頭発表とポスター発表，懇親会，から構成されており，今回もほぼ同様のプログラムで開催された．会議初日のPlenary　Talkでは，上海交通大学のCao Xinde教授から「Advanced Application of Heavy Metals-laden Biochar after Wastewater Treatment for Supercapacitors」，釜山大学校のKuk　Cho准教授から「Aerosol and Its Implications on Health」，九州大学の山本直嗣教授から「Challenges of Electric Propulsion」と題した講演があり，特にCho先生の大気中エアロゾルと健康影響に関する包括的なレビューは，PM2.5をはじめとする越境大気汚染に悩む日中韓の3カ国で行うシンポジウムの話題として最適で，会場からも多くの質問があり，非常に活発な議論が行われた．

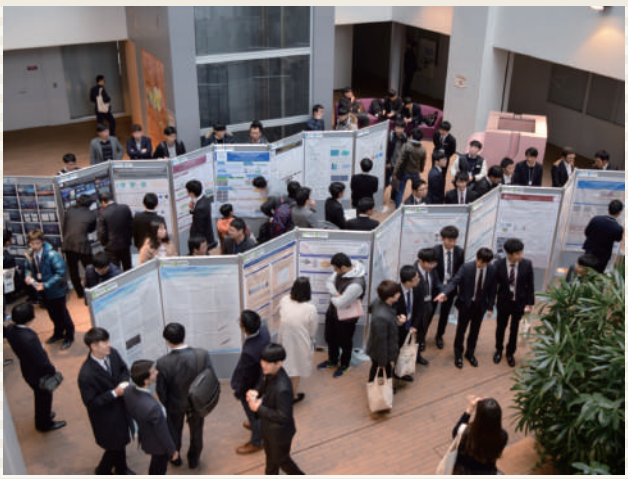
Plenary Talk後にはカフェテリア「ぞんね」に場所を移して懇親会を開催した．先にも述べたように会場に入りきらないほどの盛況ぶりであったが，特に学生協議会のアイデアで各大学から大学自慢やお国自慢のプレゼンテーション，福岡観光案内のプレゼンテーションなどは非常に好評であったようである．

会議二日目は前半戦に口頭発表，後半戦にポスターFlash Talkとポスター発表が行われた．口頭発表は物質材料（Material），エネルギー（Energy），環境（Environment）の3つの会場にわかれて平行して実施した．当初のCSS設立に関与された先生の専門が物質関連であったことから，例年，物質材料関連の研究が多いことも特徴の一つである．口頭発表は3つの研究分野に3大学からの発表者を均等に割り付けるという方針であったが，九大からの発表者には韓国や中国からの留学生も多く，いわゆる日本人学生の存在感は多少低かったことは残念なことである．

今回のCSS-EEST19では，ポスター発表者にも口頭でのプレゼンテーションの機会を確保するため，一人1分間のPoster Flash Talkという催し物を実施した．入念に1分間のプレゼンテーションを準備してすばらしい発表をする学生から，紙に書いた原稿を棒読みする学生まで，質にはバラツキがあったものの，やはり何らかの口頭発表の場を準備することが学生のモチベーション確保の観点でも重要であったと感じた．

夕刻からのポスターセッションでは，多くの参加者が会場に集合し，活発な議論が行われたようである．

韓国，中国からの参加者を中心とした集合写真．九大関係者は入りきらず全員での写真は断念．



ポスターセッションの様子

授賞式の様子とOral Presentation AwardとPoster Presentation Award同時受賞のNakamura Kentaroさん

今回は参加学生のモチベーションを向上させる目的で，参加者全員の投票によってOral Presentation AwardとPoster Presentation Awardを決定する方針とした．最終的にはOral Presentation Awardとして9名，Poster Presentation Awardとして15名の学生が表彰されたが，これは国や大学間のバランスなどを考慮しない純粋な単純集計の結果であり，それ故，Oral Presentation AwardとPoster Presentation Awardの両者を受賞した学生もいた．表彰された学生は自信をもって今後の研究や勉強に励んで貰いたいと思う．

CSS-EESTはシンポジウム開催に対して特に明確な予算のバックアップがあるわけでは無く，基本的に全てが手弁当で実施される．参加者は会場までの交通費や宿泊費は各自で負担するものの，それ以外の会議開催に関する一切の費用はホスト大学が責任を持つ，という暗黙の了解のもとで毎年1回の会議を継続してきた．これは3年に一度踏ん張れば良い，ということではあるが，今回のように参加者が200名を超える規模となれば，多少の歪みや問題も顕在化する．この会議は学生主体で運営する，との名目になっているため，総合理工学府の博士課程学生の組織である学生協議会メンバーが積極的に運営に協力してくれたことは事実であるが，責任をもって本来の意味で主体的に活動してくれる学生は，学生協議会の議長である牛尾康一さん他数名であったことも，また事実である．

九大総理工の学生にとって，CSS-EESTでの発表は博士号申請の際の業績としてカウント出来ることになっているため，論文原稿は投稿して発表はするものの，運営には全く無関心，というのが現状である．

継続することには非常に重要な意味があるが，そろそろ開催方法や運営システムを再検討する時期にきているように思う．